

保護者の時代とこんなに違う

求められる力を育てる 「大学教育」の今

2020年度から大学入試センター試験が「大学入学共通テスト」に衣替えするなど、
大学入試改革が大きな注目を集めています。

しかし入試改革も、大学教育改革、高校教育改革と三位一体で進める
「高大接続改革」の一部であることを見逃してはいけません。

しかも大学教育は、激動する社会の変化を見据えて、
保護者世代の学生時代とは大きく様変わりしているのです。

保護者のための最新大学講座
激動する社会を見据え
変化する大学教育への“備え”を

キャリア教育 Career Education

國學院大學 p.34
千葉商科大学 p.36

新しい学び Trend of University

共立女子大学 p.38
山野美容芸術短期大学 p.40

激動する社会を見据え 変化する大学教育への〃備え〃を

お子さんが無事入試を突破した後の大学では、何が求められるのでしょうか。文部科学省の中央教育審議会の高大接続特別部会（2012～14年）や高大接続システム改革会議（15～16年）の委員として当初から教育改革論議に携わってきたリクルート進学総研の小林浩所長（高等教育専門誌『カレッジマネジメント』編集長）へのインタビューを基に考えてみましょう。

取材：文／教育ジャーナリスト 渡辺敦司



リクルート進学総研所長
小林 浩

社会の変化で重視される

「何ができるようになるか」

「今入試がどう変わるかばかりが二ユースとして取り上げられがちですが、社会が大きく変わっていく中で大学教育も高校教育も、そして両者をつなぐ入試も変わっていかなければいけない、というのが高大接続改革の考え方です」

人工知能（AI）がチェスだけでなく将棋や囲碁で人間に勝つなど、技術革新には目覚ましいものがあります。一方で少子高齢化やグローバル化はますます進み、これから社会に出る若者は「アジアをはじめ多様な国の優秀な人たちと」一緒に働いたり競争したりしていくのが当たり前にな

ります」（小林所長）。

そうした環境の変化にとりわけ敏感なのが、社会に最も近い立場にある大学です。各種会議で「これからの日本は『大学の国』から『卒業の国』へ」と訴えてきた小林所長は、こう解説します。

「これからは、社会に対して『〇〇大学を出た』ではなく『〇〇大学で何ができるようになったか』を、大学は保証しなければならぬし、学生も証明しなければいけません」

そのために、大学はさまざまな学習の場や成長機会を学生に提供するようになってきているのです。期間や行先も多様な海外留学プログラムを用意しているのはもとより（**図表1**）、授業にインターンシップでの実践

を組み込んだり、企業との共同研究を行ったり、地域と連携して課題解決型のプロジェクト学習を行うなど、多くのチャレンジの場が用意されるようになってきているのです。

しかし、同じ学部や学問でも、それをどのように学べるのかは同じではありません。

「大学を選ぶ際は、これまでのような偏差値の辺りではなく、学び方の違いを調べ、自分自身が入ってからどれだけ成長できそうかを基準に選んでほしい」と強調します。

卒業後を意識した

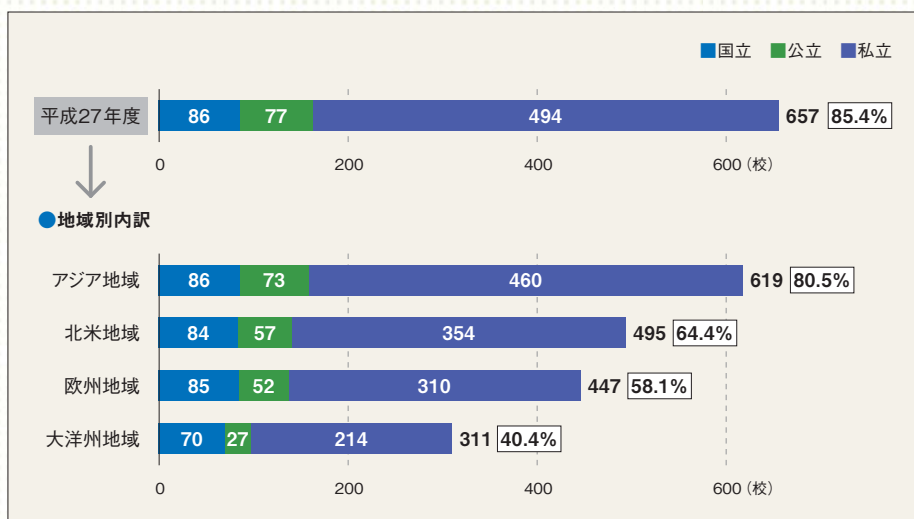
「二つのポリシー」

各大学の入試要項には、冒頭に「ア

ドミッション・ポリシー」（入学者受け入れの方針 以下AP）が掲げられるのが今や当たり前になっており、オンラインパスの段階から詳しく説明を受けるなど、高校生にとってもAPはなじみのある言葉になっています。

しかし「ポリシー」は、それだけにとどまりません。大学には17年度からAPだけでなく「カリキュラムポリシー」（教育課程編成実施の方針）「ディプロマ・ポリシー」（卒業認定・学位授与の方針）の策定が義務付けられています。まず社会にどのような学生を送り出すか、卒業時に何ができるようにするのかを示すディプロマ・ポリシーを描いてから、そうした学生を育成するためのカリキュラム・ポリシーを定め、それにもとづいた教育に取り組む学生を

図表1 海外の大学との大学間交流協定を締結している大学(平成27年度)



文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について(平成27年度)」より編集部作成

選抜するためのアドミッション・ポリシーを定めなさい——というのが、大学教育改革の基本的な考え方です。

入学者選抜で問われる「カレッジ・レディネス」

「学力の3要素」という言葉を学校から説明してもらった保護者も少な

くないことでしょうか。①知識・技能 ②思考力・判断力・表現力 ③主体的に学習に取り組む態度——のことで、小・中・高校では、こうした幅広い学習をバランスよく育成することが、法律で定められています。大学入学共通テストも、①を基にした②を中心に測定することを目指しています。特に高大接続改革では、③を大学教育にも対応できるように「主体性をもつて多様な人々と協働して学ぶ態度(主体性・多様性・協働性)」と言い換え、各大学が独自に行う入学者選抜を含め、3要素すべてを評価して入学者を選抜することを求めています。

小林所長はこの内容を、「カレッジ・レディネス」という言葉で捉えることを提案しています。「うちの大学・学部に入学するために、このような準備をしてきてください」ということです。例えば東京大学では「高等学校段階までの学習で身につけてほしいこと」として、教科別に詳しく解説をしています。国語であれば、総合力を求め、その中心は(1)文章を筋道立てて読みとる読解力 (2)それを正しく明確な日本語によって表す表現力であることが書かれています。

カレッジ・レディネスは、教科のペーパーテストだけで測られる知識・技能や思考力・判断力・表現力にとどまるものではありません。3つのポリシーや

入学者選抜の内容を読み解いていくと、各大学が求めていることとその教育内容が変わってきていることが理解できるのではないのでしょうか。

振り返りで自己肯定感を育て「何をしたいか」を明確に

さて、各大学がAPや入学者選抜として発信しているカレッジ・レディネスと、お子さんの志望はうまくマッチしているでしょうか。その前には何よりも、お子さんが大学進学に向けて「何を学びたいのか。そしてどうなりたいのか」といった動機を明確にしていくことが重要です。

これについて小林所長は、お子さん自身が▽Wii(何をしたいのか)▽Can(何ができるのか)▽Must(しなければならないことは何か)——で考えるよう提案しています。もちろんWiiが明確であればよいですが、そうではない高校生も多いでしょう。まずMustから始め、それから徐々にCanを増やし、Wiiをはっきりさせていけば、と小林所長はアドバイスします。

そうした過程で重要になってくるのが、振り返りであり、振り返ることを通じて見直しをもつことです。既に高校で、ポートフォリオ(詳細はP.13参照)が導入され、その利用を推

奨された生徒も少なくないことでしょう。行事や部活動、学校外も含めた高校時代の学びを、記入を通して振り返り、自分の成長を確かめていくものです。

振り返りの意義を、小林所長は「『小さなガッツポーズ』を積み重ねることを通して、自己肯定感を育むことです」と表現します。

ぜひ保護者とお子さんの間でもポートフォリオを材料にWii・Can・Mustについて話し合うなど、お子さんがWiiを育てていくことを、家庭でも応援してください。

保護者も新しい情報のキャッチを

高校生の進路選択の最大の相談相手は保護者であり、保護者の影響はとて大きいといわれています。「それなのに従来型の考え方をしていると、子どもの進路を狭めてしまいます。保護者自身が、新しい情報を面白そうとポジティブに捉えてはどうでしょうか」と小林所長は投げかけます。

次のページから、各大学がどのように教育改革に取り組んでいるか、二例として紹介しています。ぜひ今の大学を知っていただければと思います。